The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十七巻第二号　平成二十一年三月

「浄土」の訳語について
――『無量清浄平等覚経』を中心として――

肖　越

一　問題の所在

「浄土」には二つの意味がある。まず、羅什のいう「浄土」は大乗一般の諸仏の浄土と、大乗仏教の菩薩たちの自利利他実践を表している「浄仏国土」の意味である。[1] この場合の「浄」は動詞として取り扱うべきで、国土をきよめるという意味である。また、羅什訳の『阿弥陀経』に「浄土」という訳語がない。つまり、羅什は極楽を「浄土」と思わなかった（平川：18）後世になって、阿弥陀仏の国土（*Sukhāvatī*）を「浄土」とも呼び、その国土へ往生する教理を「浄土教」と呼んでいる。この「浄土」の「浄」は形容詞で、きよらかな国土（清浄な国土）という意味である。[2] だが、*Sukhāvatī* は「浄土」という意味ではなく、極楽である。極楽を「浄土」と呼ぶのは曇鸞（476-542？）以降、次第に現れた。[3] それは曇鸞の誤解によってできたのか或いは別の原因があるのか？　筆者は「初期無量寿経」を研究する際に、『無量清浄平等覚経』（以下『平等覚経』）と「浄土」の訳語とに、何かの関連性があると認識し、[4] 本論では昨年度の拙稿（2008）に続き、『平等覚経』における「清浄」を中心として、浄土の訳語を究明したい。[5]

二　『平等覚経』の「須摩提」と「無量清浄仏国（土）」

初期大乗経典でもっとも古く、詳しく阿弥陀仏の極楽を説く経典は、『大阿弥陀経』（以下『大阿』）と『平等覚経』であった。しかし、二経とも「浄土」という語はない。だが、後者の『平等覚経』については、「浄土」の訳語と必ずしも無関係といえない。『大阿』はもっとも古いが、音写語が多くて現在の研究者にとっても読みにくい。この故に、後に『大阿』に基づいて『平等覚経』が修訂された。周知のように、『大阿』では極楽を「須摩題」とし、『平等覚経』では「須摩提」という音写語で示した。そして「無量清浄仏国（土）」という名前と「浄土」との関連性を無視してはいけない。[6] ここで『平等覚経』に見られる「無量清浄仏国（土）」と言う名前を中

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

心にして検討してみよう。

『平等覚経』で極楽を「須摩提」と訳しているのは、僅か二回（『大阿』に「須摩題」一回）のみであって、その中の一回は『大阿』にない独自な偈にあった。このことから二つのことが言える。①『平等覚経』の訳者は「須摩提」の訳語に注目した。②僅か二回のみの音写語が漢語を母国語とする読者に殆ど印象を与えていないことは十分に考えられる。一方、「無量清浄仏国（土）」という語は『平等覚経』に少なくとも六十回以上見られる。『平等覚経』では仏国土の名前は、むしろ「無量清浄仏国（土）」を中心としていた。この訳語は「無量清浄仏」の名前から生まれたものだとしか考えられない。一つの経典に六十回以上も出現することによって、後の読者らは、「清浄な国土」と理解しても少しも不思議ではないと考えられる。それに、無量清浄の原語について、今までの見解は二つしかなかった。それはNattier氏のインドの言葉を誤解した結果、無量清浄に変えた説（2007）と、筆者がいわゆる梵語の存在を認めず、中国人に分かりやすくするために、中国本土の道家思想に基づき作られたという説である（2007）。ここで、「清浄」に対応している原語があるかどうかについて、昨年の拙稿に補って論じる。（1）もし清浄の原語があれば、他の諸本にもこの名前か、類似している名前が出るべきである。しかし、現存の無量寿経諸本に阿弥陀仏の名前としての無量清浄は『平等覚経』にしか見られない。（2）同じく支謙訳と考えられる『維摩経』などにも「清浄」も出ているが、『平等覚経』[7]と内容を比べると、両者は全く違う性格を持っているので、両者の「清浄」という語に直接の関連性はないと考えられる。（3）『大阿』と『平等覚経』とは仏名と菩薩名の他に、ほぼ一字一句対応しているので、そのことから、『平等覚経』が完全に翻訳されたのではなく、修訂者の意志によって修訂されたものだとしか考えられない。以上の諸因によって、「無量清浄」の仏名は中国文化に基づき作られたとしか考えられない。

三　『平等覚経』の「清浄」から「浄土」へ

『平等覚経』修訂者が音写語を意訳語に「小さく」変えたことによって、『大阿』の内容を大きく変える意図（無量光明と智慧の仏から無量清浄の仏へ）があったかどうかは、現在の時点で考証することができない。しかし、『平等覚経』と「浄土」の訳語との関わりは否定できない。次の二つの証拠を通して論じよう。まず、曇鸞に強く影響を与えた菩提流支訳の『無量寿経論』（T26, No.1524）に「浄土」の用語が一回出ている。また注目すべきは「能生清浄仏国土」（T26, 233a01）という句である。この、「清浄仏国土」には二つの読み方があり、清浄な仏の国土と、清浄仏の国土である。筆者は後者をとる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

即ち、清浄仏の国土は無量清浄仏の国土である。これによって、菩提流支は『平等覚経』を参考したと説明できる。そして、曇鸞著『無量寿経論註』（以下『論註』、T40, No.1819）では初めて、頻繁に極楽を安楽浄土としている。(8)

「安樂浄土諸往生者無不淨色無不淨心。畢竟皆得清淨平等無爲法身。以安樂國土清淨性成就故」（T40, 828c）。

右の文に「安楽国土清浄性」、「清浄平等無為法身」、「浄土」などの語がある。無量寿経諸本の中で、最も「安楽国土の清浄性」を表している経典は『平等覚経』しか挙げられない。「清浄平等無為法身」は四つの語から成り立っており、「清浄平等」は『無量清浄平等覚経』の経名と一致し、また『無量寿経論』にも「平等法身」「無為法身」の句もある。合わせて考えれば、曇鸞は菩提流支の影響を受けたのみならず、『平等覚経』の影響を受けたことが分かる。(9) このことにより、菩提流支の『無量寿経論』と、曇鸞の『論註』に出ている「浄土」は、羅什の「浄土」とは違う系統であって、『平等覚経』の無量清浄仏の名前を参照したものであることが十分に考えられる。(10) もう一つ注目すべきは、玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』には、極楽を「浄土」というだけではなく、「清浄国土」、「浄仏土」、「無量清浄喜楽」などの表現がよく見られる。玄奘訳で極楽を「浄土」や「清浄」と訳していることが『平等覚経』の影響かどうかについては今後の課題にしたい。

四　結論

以上の考察を纏めれば、次のような結論となる。①『平等覚経』では、阿弥陀仏の国土を「須摩提」というより、むしろ「無量清浄仏国（土）」とするほうがよく見られる。これは無量清浄仏の名前からできたものである。『平等覚経』では、「浄土」の語は用いられないが、極楽の清浄性を表すのは『平等覚経』の一つの重要な特徴である。この特徴は後世の極楽を表す「浄土」（清浄な国土）の訳語に影響を与えた。②『平等覚経』に現れた「清浄」（無為・涅槃・法身の意味）の影響を受けて、菩提流支・曇鸞などが極楽に「浄土」、「清浄国土」と言う訳語をあてた。それは、阿弥陀仏の極楽を表す「浄土」の原語がないため、『平等覚経』の無量清浄という仏名からの影響を受け、あてられたものだと考えられる。即ち、中国の道教の思想の最高の旨としての清浄無為に基づき、阿弥陀を無量清浄に書き換えることによって発展してきたもので、その意味は清浄なところ、無為なところ、また涅槃するところという意味である。

［参考文献］（最小限）
①印順 1986＝印順『初期大乗佛教之起源與開展』、②平川＝平川彰 1990『浄土思想と大乗戒』、③藤田＝藤田宏達 2007『浄土三部

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

経の研究』、④香川＝香川孝雄 1993『浄土教の成立史的研究』、⑤肖＝肖越（XIAO Yue）、2007 The Names of the Buddha（*Amituo/Wuliang qingjing*）in the Early Recension of the *Larger Sukhāvatī-vyūha-sūtra*（『佛教大学佛教学会紀要』第13号、2008「「初期無量寿経」における阿弥陀と無量清浄」（『印度学仏教学研究』第五十六巻第二号）、⑥NATTIER＝JAN NATTIER 2006, 7 The Names of Amitābha/Amitāyus in Early Chinese Buddhist Translations（1, 2）、⑦HARRISON＝PAUL HARRISON 2002 The *Larger Sukhāvatī-vyūha-sūtra*.

1　藤田：382-90、平川：5、香川：172-75はその代表的なもの。

2　本発表のように、「浄土」の「浄」を形容詞か動詞かで考えることについては、辛嶋静志氏の講義によって与えられた。本発表の結論は、辛嶋氏の結論とは異なるものとなったが、辛嶋氏に深く謝意を表したい。

3　すでに藤田氏に指摘されたように、「羅什以後になると、いち早く南朝の文人謝霊運（385-433）は阿弥陀仏の極楽世界をさして「浄土」と呼んでいた。」（2007：3-4）、ただし、その理由は何か、また後の曇鸞に影響を与えたかどうか、判断が不可能なために、筆者はこの点についての解釈は保留する。

4　『平等覚経』に出る「無量清浄仏」、「無量清浄仏土」との関連性は平川氏によってすでに言及されているが、「無量清浄仏」の清浄の原語は不明であるとした。（平川 1990：22）

5　紙数の制限で、大乗仏教の「浄仏国土」の思想については、藤田氏、平川氏、香川氏など諸氏の先行研究を参照。

6　『大阿』に極楽を「阿弥陀仏国土」とも呼んでいるが、「阿弥陀仏国土」は「浄土」の用語と関わりがないと思われる。

7　『平等覚経』の翻訳者について色々な異説がある（藤田 2007：46-56、香川 1993：30-51）。印順氏は最初に支謙訳と指摘した（1975：759-763）。

8　注3参照。また、Harrison氏は新たな無量寿経写本の研究で、曇鸞に影響を与えた菩提流支が訳した『仏説仏名経』（T. 14, 159b）の句を引いて比較した。その中に、「西方清浄土」という語句が出ているが、西方世界だけではなく、各世界にも清浄の用語を使用している。対応している原語はSukhāvatī であった（Harrison2002：209）。同経は『平等覚経』以降の訳経であることは確実であり、また菩提流支も格義仏教の傾向があったので、極楽を「清浄土」で表していることに注目すべきである。

9　『観無量寿経』に現れる極楽の清浄性の影響を受けたことは無視してはいけない。『観無量寿経』における清浄については今後の研究課題としたい。

10　もう一つの証拠としては道綽の『安楽集』に『平等覚経』と浄土法門の関係の文がはっきりある。（T47, 4c-5a）

〈キーワード〉『平等覚経』、無量清浄、無量清浄仏国土、無為、浄土

（佛教大学大学院・佛教大学総合研究所嘱託研究員）

NII-Electronic Library Service